

日英両語における音声面の比較

小 林 淑 哉

1, 序 論

日本人が英語を学習するに当って日本語の特性が阻害となる。そこから日本語的英語が生れる。これは音声面に限らず語法の面においても同様である。日本語的英語となることを最大限に避けるためには、日本語の特性が英語習得に際して与える干渉を適確に把握することである。日英両語の比較研究の目的の一つはここにある。国広哲弥氏は次のように述べている¹⁾。

「日英両語比較研究第1の目的は、学習困難点の予想及び両語の食い違いをまず頭で理解させようとする『理論的学習』に役立てることである。」

構造言語学及び変形文法は、系統を異にする言語の比較対照研究に大きな貢献をしてきた。その理論を英語教育に役立てた教材としては、英語教育協議会(ELEC)発行の「オーラル・アプローチ教本」(Archibald A. Hill 著)、英宝社発行の「現代英作文」(勇康雄、大橋義昌共著)、同社発行の「大学英作文の基礎」(勇康雄、武田良一共著)など次々と良書が出版されて、英語指導に大きな成果を上げている。

本論は、音声面について日英両語を比較し、更に英語指導に役立てようとするものである。

2, 促 音

/p, t, k, b, d, g/ が単語の語尾にあらわれる時、破裂を伴う場合 ([p⁻, t⁻, k⁻, b⁻, d⁻, g⁻] で表わす) と破裂を伴わない場合 ([p^l, t^l, k^l, b^l, d^l, g^l] で表わす) とがある。

Who will he see after? 1a

Who will he seek after? 1b

1b の seek はそのあとに母音で始まる単語が続いているので、音の連結(linking)によって [si:k⁻] と発音され [si:k^l] とはならない。従って 1a と 1b の意味の違い

ははっきりと聞きとることができる。

I pass by her.	2 a
I passed <u>ed</u> by her.	2 b
I can swim.	3 a
I can't swim.	3 b
How much does the typewriter weigh?	4 a
How much does that <u>er</u> typewriter weigh?	4 b
I will buy the cake.	5 a
I will bite the cake.	5 b
They lie to me.	6 a
They lied <u>ed</u> to me.	6 b
I close my eyes.	7 a
I closed my eyes.	7 b
I lay the doll down carefully.	8 a
I laid the doll down carefully.	8 b
She will spy the stranger entering the yard.	9 a
She will spike the stranger entering the yard.	9 b

上文中、bの下線部は、破裂を伴えばaとbの意味の区別が聞きとれるが、破裂を伴わなければaとbの区別がききとれなくなる。しかも下線部が破裂しない場合が日常会話では頻繁に起るのである。もっとも5aと5bについては、余剰の特徴 (Redundant feature)²⁾ が両者を聞きわけの役に役立っている。すなわち buy [bai] の [ai] は bite [bait] の [ai] より母音が長いので、この二つの発話を聞きわけることができないわけではない。6a と 6b、8a と 8b、9a と 9bについても同様である。しかし上文中、2から9までのそれぞれの minimal pairs すべてにわたって共通して言えることがある。それは、bの下線部が破裂を伴わない結果、そのあとに無音の一瞬があるということである。この「無音の一瞬」とは何か。岩崎民平博士は破裂音について次のように述べている³⁾。

「破裂音は完全に発音すると、次の3段階を含むものである——

- (a) 気流通路の閉鎖段階
- (b) 閉鎖の持続段階
- (c) 気流通路の開放段階

[p^l, t^l, k^l, b^l, d^l, g^l] は上記(a)と(b)の状態を示す。そして同博士は [p^l, t^l, k^l, b^l, d^l, g^l] を「破裂音が語末に来てあとは音の休止 (pause) となる場合」と述べている⁴⁾。一方金田一春彦氏は日本語の促音について次のように述べている⁵⁾。

「ツメル音は次の音が発音されるばかりの状態で一拍分とめる音」

すなわち「無音の一拍」である。従って英語の破裂を伴わない破裂音の直後の「無音の一瞬」は、日本語の促音に他ならない。ただこの両者の違いは、英語では一音節とは考えないのに、日本語では一拍として考えるという点と、英語では極端に短い時間であるのに、日本語では比較的長い時間をかけているという点である。

尚、両語の促音はどういう場合に起りうるか。そして示差的特徴 (distinctive feature)⁶⁾ をなすかどうかについて考えておこう。

日本語の促音は /p, t, k, s, ʃ, tʃ/ の前に起り、示差的特徴をなす。

(イ) /p/

イッピキ (一匹)

サッポロ (札幌)

(ロ) /t/

ウタ (歌)

ウッタ (売った)

イタ (居た)

イッタ (言った)

イタ (板)

イッタ (煎った)

(ハ) /k/

カキ (柿)

カッキ (活気)

アカ (垢)

アッカ (悪化)

アカ (赤)

アッカ (悪貨)

オカナイ (置かない)

オッカナイ (おっかない)

サキュウ (砂丘)

サッキュウ (早急)

ドキュウ (読経)

ドッキョウ (独協)

(ニ) /s/

ケソウ (懸相)

ケッソウ (血相)

(ホ) /ʃ/

タシ (足し)

タッシ (達し)

(ヘ) /tʃ/

日英両語における音声面の比較

イチ (一)

イッチ (一致)

英語の促音は次の二種類に大別できる。

〔1〕 /p, t, k, ʃ, tʃ, b, d, g, dʒ/ が単語の語尾にあり、その前に短母音があって、殊にその短母音にアクセントがある場合は、この短母音と上記子音の間に促音らしきものを感じる。しかしこの場合、促音の有無が示差的特徴とはならない。

〔2〕 単語の語尾の破裂音 /p, t, k, b, d, g/ が破裂を伴わない場合、[p^l, t^l, k^l, b^l, d^l, g^l] そのものが「音の休止」すなわち促音の役割をする。この場合示差的特徴となる。

以上述べた日英両語の促音の比較は、次のようにまとめることができる。

日 本 語	英 語	
一拍を形成する	一音節を形成しない	
比較的長い	極端に短い	
示差的特徴をなす	示差的特徴をなす場合	示差的特徴をなさぬ場合
/p, t, k, s, ʃ, tʃ/ の前に起りうる	単語の語尾 /p, t, k, b, d, g/ が破裂を伴わない場合	単語の語尾 /p, t, k, ʃ, tʃ, b, d, g, dʒ/ の前に短母音があって、殊に、その短母音にアクセントがある場合、短母音と子音との間に起る

尚、二つ（以上）の破裂音が連続する場合について、岩崎民平博士は次のように述べている。

「最初の破裂音は破裂（開放）はない。たとえば apt /æpt/, stopped /stɒpt/ の /p/ は開放されず、fact /fækt/, looked /lukt/ の /k/ は開放されない。『子音＋母音』（CV）を基本的な音節とする日本語で英語の音が正確に表わせないのは、ここにも大きな理由がある。以下に開放しない音に下線を施して例を追加しよう。

robbed /rɒbd/, notebook /nóutbuk/, part time /pá:t taim/, big boys /bí: bóiz/, that day /ðæt déi/, background /bækgraund/

Act Two /ækt tú:/ や wept bitterly /wept bí:təli/ ではまん中の破裂音 /t/ は第一段階も第三段階もなく沈黙によって表わされる。」

最後に、注意しなければならないことは、英語の初歩的学習者は英語を発音する場

合、殊更不必要に促音を入れる傾向がある。その第一の理由は日本語に促音があるために、その促音の発生条件に似たような条件が英語に生じたときに起る現象であるが、第二の理由としては、小学校のローマ字教育で日本語の促音を表わすために、同一子音を二つ重ねるというローマ字表記法の習慣が身につく、中学校以上の英語学習の際に、逆も又真なりと誤解して、英語で同一子音が二つ重なれば、日本語の促音と同様に発音してよいと思い込んでいるからである。音声指導上大いに留意すべき点であろう。

3. 無 声 母 音

日本語は撥音及び促音を除けばすべて開音節 (open syllable) なので、日本人は極端に言えば英語の子音一つ一つに母音を付加して発音することもある。stand [stænd], glimpsed [glimpst], sixths [siksθs] などとはそれぞれ一音節として発音される筈であるのに、[sutændo], [gulimupusuto], [sikusuθusu] などとなりかねない。

しかし同時にそれと逆のような現象もある。すなわち、日本語ではある条件の下では母音が無声化する⁸⁾。そのために英語を発音する時にも、似たような条件の下では、母音が無声化する傾向がある。(以下発音記号中、記号の下に。印のある母音は無声母音を示す。)

父子 [-fu- <u>f</u> i]	節 [-fu- <u>f</u> i]
槌 [-tsu- <u>t</u> f <i>i</i>]	土 [-tsu- <u>t</u> f <i>i</i>]
稗 [-h <i>i</i> -e]	冷え [-h <i>i</i> -e]
富士 [-fu- <u>d</u> ʒi]	藤 [-fu- <u>d</u> ʒi]

私は四国へ行きました。

[watakuʃiwa ʃikokue jukimaʃita]

父親と二人で出て来た。

[tʃitʃiojato futaride detekitə]

以上は東京方言における無声母音の例である。従って国広哲弥氏が述べているように⁹⁾、日本語の無声母音は次の場合にあらわれる。

- 1) 無声化を起すのは狭母音 /i/ と /u/ である。
- 2) その音声的環境は無声子音と無声子音又は呼気段落にはさまれた場合である。
- 3) 最初の高アクセントが来ない場合。
- 4) 1) と 2) の条件を満たす母音が2つ以上連続した場合は無声・有声は交互

に現われる。

このような日本語の特性が英語の学習を阻害して次のような発音を招く。

university [jù:nivé:siti], municipal [mju:nísipəl], hospital [hóspitl], puttee [putí:], superior [supíəriə]

4, リ ズ ム

日本語のリズムは syllable-timed であるために、stress-timed であるべき筈の英語を我々日本人は syllable-timed rhythm で発音する傾向がある¹⁰⁾。

Énglish is éasy.	1 a
The Énglish lesson is éasy.	1 b
The Énglish lesson is very éasy.	1 c
The róse is préttý.	2 a
The red róse is préttý.	2 b
The little red róse is very préttý.	2 c
I líke to físh.	3 a
I dón't like to físh.	3 b
I dón't like to catch físh.	3 c
My fáther told us a stóry.	4 a
My fáther told us an interesting stóry.	4 b
My fáther told us a very interesting stóry.	4 c

上記例文を見ると、a → b → c と後の文に行くに従っていろいろな要素が加わって行く。しかしこれら三つの文はほぼ同じ時間をかけ、しかも同一のリズムで発音しなくてはならない。ところが我々日本人は、いろいろな要素が加わって行くにつれて長い時間をかけて発音し、リズムも変えてしまうことがある。これはまさに英語を日本語流に発音するからに他ならない。

〔注〕

- 1) 「構造的意味論」 p. 1
- 2) テーマと研究 (Ⅲ) (研究社) 「構造言語学」 (太田朗著) p. 21
- 3) 現代英語教育講座 (研究社) 第四巻 「英語の発音」 p. 98
- 4) 同上 p. 100
- 5) 金田一春彦著 「日本語」 (岩波新書) p. 79
- 6) Archibald A. Hill: Introduction to Linguistic Structures, pp. 32~43, 62~65.

小 林 淑 哉

- 現代英語教育講座（研究社）第四卷「英語の発音」 pp. 17, 27
英語教授の基礎（研究社）C.C. Fries & A.C. Fries 著 山家保訳注 p. 361
英語教授法辞典（三省堂）p. 153
日英比較語学入門（大修館）榎垣実著 p. 146
- 7) 現代英語教育講座（研究社）第四卷「英語の発音」 p. 101
8) 英語教育1962年9月号 p. 37「母音の無声化について」
英語教育1962年11月号 p. 37「母音の無声化について（ふたたび）」
音声学会会報1966年12月号 p. 4「無声母音とアクセント」杉藤美代子
音声学会会報1969年12月号 p. 1「クサ」考（アクセントのある無声化母音）杉藤美代子
現代英語教育講座（研究社）第七卷「日英語の比較」p. 35 太田朗
9) 「構造的意味論」 p. 190
10) Kenneth L. Pike: Phonemics, 1947 p. 13A
Archibald A. Hill: オーラル・アプローチ教本 vol. 1, p. 28